

3学年通信

Dreams come true

山形県立米沢興譲館高等学校

3 学年通信 No.73 通算 253 号

2018. 1. 12 (金) 可能性 ∞

3 年諸君へ 廣瀬 辰平

はじめての寄稿です。人が作っている通信に文章を書くという機会はなかなかないので立場に関係なく、きわめて個人的な考えを、激励もこめて綴りたいと思います。久しぶりに長い文章を書きましたが、なかなか筆が走らず、ぎりぎりになってしまいました。なるべく本当に思っていることを、生きた文章で綴りたいと思い、手が動くのを待っているうちに、今日になりました。

最初に「命」についてです。

なぜ「命」のことを書こうと思ったのでしょうか。自分でもわかりませんが、今年度、いのちの講話は交通事故でお子さんをなくされたお話でした。新年、始業式での校長先生や学年集会での横山先生のお話では、皆がこうして無事そろって会えることへの感謝についてありました。センター試験を迎える不安をときほぐすための言葉がいろいろありますが、「命までとられない」といったりすることもあります。そんなことが関係あるような気がします。

少し話を進めて、「命を大切にする」とはどういうことなのでしょう。私は、事故、事件に巻き込まれ命を落とす子どものニュースを見るたびに、自分の子は今元気で遊んでるかな、と不安になったり、明日は大丈夫かな、と思ったりします。でも、そんなことを考えだしたらキリがないとも思ったりします。「命」よりも大切にしなければならないものは、私には思いつきません。でも、「命を大切にする」とは、ただ生きることではない気がします。

自分自身を振り返ると、「命を大切にできている」と自覚して感じるときは、余りありません（というかありません）。でも、怠けているとき、後ろめたいとき、自分は「命」に対して誠実に生きていないような気がするときがあります。人をきちんと思いやれるとき、自分の時間を大切に使えているとき、努力ができているとき、そういうときは、あまり余計なことを考えずに、生きていくような気がします。「命を大切にする」ということは、とても日常的なことで、前向きなことだと思います。

さて、あまりに受験からかけ離れた話から入りました。しかし、最後にはつながるはず（そういう予感がしたのでこの文章を書き始めましたから）。

受験の結果のことを考えると、受験は合格するものもいれば不合格になるものもあります。君たちが合格すれば、誰かが不合格になります（当然ですが）。君たちがみな志望を達成することはもちろん切望していますが、それと同じくらい、合格するに足る人物であることを期待したいと思っています。横山学年は日本一を目指しています。華々しい大学の合格実績を上げる高校はいくらもあると思いますが、一人ひとり自信を持って社会に放つことのできる高校はそれほど多くないと思っています。順位が一番上にあることが日本一ではありません。私が好き

な「バガボンド」という井上雄彦氏の漫画で、天下無双を目指し、とにかく敵を切りまくる若き宮本武蔵に、剣の達人柳生石舟斎はこう言います。「天下無双とはただの言葉である」と。とにかく強いものから勝ち続ければ、最後に天下に双ぶもの無き人間になると宮本武蔵は戦いの日々を身を投じますが、武の達人たちは、争うことより、自分を大切にし、磨くことに「武の価値」を見出して、武蔵を導きます。私が「バガボンド」を好きな理由は、井上氏の画力だけではなく、人の成長について考えさせてくれるからです。また、受験から遠ざかりかけているので戻ります。「受験」という戦いに君たちがどのように向き合っているかですが、それは人から勝つことではないはず。今まで、受験に向けた多くのアドバイスをわれわれ教員は君たちにしてきました。それは、あくまで、今、具体的にどうすればいいのかの指標であって、大義ではない。目標を達成するためには、小さな目標として、きわめて打算的な目標を立てたほうが頑張れることがあります。それは大切なことでもあります。ただし、それはあくまで小目標であり、君たちの人生の大義ではありません。「受験」を通して自分の成長と向き合うこと、それを君たちには求めたいと思うし、できると思っています。今まで、他人の言うことをあまり聞き入れて来なかった者、自分は自分とやってきた者、みんなできなくて自分だけ解けたら、、、と少しだけ思ってしまった者、自分の将来のメリットだけを考えて受験や進学を考えてしまっていた者、当然いると思います。でも受験の本番が近づくにつれ、そうではないということに気づき、実感している只中だと思います。君たちは、これから始まる受験を通して、多くの成長をします。私は、興譲館は日本一でありたい。興譲館で学んでいる君たちが日本一であると誇りたい。そう思っています。押し付けがましく思うかもしれませんが、君たちには日本一を求めたいし、現状に満足せず成長し続けて欲しい。興譲館での経験は間違いなくかけがえのないものです。でも世界はまだまだ広い。でも、見ようとしなければ、見えないものも多くあります。日本一の高校生をめざし、最後まで努力を続けて欲しいと思います。

自分が高校生のときに、自分の受験と進学についてどの程度真剣に考えていたかあまり覚えていませんが、少なくとも今の君たちよりはぼんやりと考えていたような気がします。ただ、先生になるということや、よい社会をつくりたいということは考えていたかもしれません。でも、興譲館で今のような働き方をしていることや、12年前（もうそんなに前になります）前任校では、進学とは無縁の職場で講師として勤めましたが、その経験も想像していませんでした。ただ、尊敬できる先輩や生徒との出会いは間違いなくあって、その経験があって今の自分があるのだと思います。予想していないことばかりが起こり、人生はその都度軌道修正されませんが、間違いなくずっと考えてきたことがあります。それは、「自分は何かをしなければならぬ」と考え続けてきたことです。あまりに漠然としたものですが、私にとっては、自分がそう思い続けてこれたことや、「何か」を求め続けてきたから、今の自分があると思っています。これから君たちが迎える進学やその先の就職において、今から決まっていることは何一つありません。今望んでいるものとは違う道を歩むことだってあります。でも、自分から求め続けていけば、必ず出会うべき人に会うべき時に会い、自分にとってかけがえの無い財産になります。今、具体的な形が見えている必要はありません。でも、未来に必ずそれがあると確信を持って努力することが大切だと思っています（たぶん私は死ぬまで、自分には何かができるし、誰かと出会うと思いつけるとしています）。

「白雲高く、蒼風（そうふう）満ちたり。いざ 決戦の時、未知なる光に駆けよ！」

年若き同志達へ 2018年新春 檄文

一教師 山口和士

目を瞑（つぶ）ると、わずか150余年前、多くの若者達が、この国の未来を信じ、大国の圧力に屈せず、国禁を犯して海を渡り、命を賭けて世界を見、新たな独立国「日本」を立ち上げた光景が浮かんでくる。圧倒的な文明の差、経済的格差、政治的格差、科学研究の格差を撥（は）ねのけ、蔑（さげす）まれていた東洋の小国日本人の誇りを取り戻してきたのは、卑屈にならず「学ぶ」ことの真価に気づいた、若き先達（せんだつ）たちの「夢」であり、「志」であったはずだ。彼らは皆、君らと同じ10代だった。私もまたそうして18歳で、故郷を後にし、「志」のために、人生を賭けて生きてきた。諸君よ、決して未知への挑戦を躊躇（ためら）ってはならぬ。故郷の山河は、その決断を必ず喜んでくれるに違いない。

年若き同志達よ！「時」は波のように押し寄せ、ときに若き君の未来を阻（はば）もうと立ちふさがらるだろう。しかし、その「時」に敢然と挑む者のみに、「道」は拓かれ、「陽光」がきつと君を前に導く。周囲を見よ！共に未来に挑もうとする仲間達が、大勢固く握った拳（こぶし）を天に差し上げ、空を駆ける「白雲」を見上げている。諸君よ、君は孤独ではないはずだ。無心に「気」を高め、凍れる平原を、仲間と共に割って進むのだ。声を限りに叫び、荒れる大海をもともせず、割って進むのだ。時代を動かす蒼（あお）い風が、今また大地、大海に満ち、諸君に勇気を与えている。その一步を踏み出す勇気こそ、我らの「希望」、「未来への光」。いざ、決戦の時！君の「勇気」が「新たな時代」を創るのだ。決して振り返ってはならぬ。一気に伶俐（れいり）な瞳を開き、大地を、大海を割って進むのだ！

思えば、この国は何度も騒乱の嵐や、繰り返し迫りくる天災のために、血の涙を流した。しかし、数千年にわたって苦しんできた小さな島国日本を、いつも救ってきたのは、故郷の山を信じ、故郷の川を信じ、故郷の海を、島を信じ、逆境の中から立ち上がり、社会の矛盾や理不尽に堂々と戦いを挑み、未来への「希望」を捨てなかった「勇気ある若者」たちであった。君もまたその一人ではないか。

諸君よ、君は何のために学ぶのか。「ただ、自分の未来のために」とのみ応えるのなら、それはあまりに寂しく悲しいことだ。君が輝く瞳で挑む「未来」には、必ず己を賭ける価値がある。君を待っている、未だ見ぬ友、恋人、家族、民人（たみびと）のために、君が出遭う全ての者達のために、今こそ堂々と「天」に恥じない勝負をせよ！それが「学ぶ」ことの意味であり、何世代にもわたって諸君の血流に刻まれた遺伝子の「生きて未来を拓く」意味なのだ。

センター試験は、年若き同志たる「君」の、「真実」を自ら追求するための、最初の関門。いつもどおりの姿勢でペンを握り、焦らず、慌てず、冷静に問題に向かえばよいのだ。全ては「小さな勇気」から始まる。若者としての「正義」を貫き、愚かな騒乱を招こうとする黒衣の識者に敢然と立ち向かい、「平和」を守り続けることを決して忘れてはならぬ。そのために、君らの「意志」と「勇気」を強く磨くのだ。

年若き同志たちよ、諸君がいる限り未来は「意志」の光に満ち、「勇気」は人々を導き、「この国」は生き続ける。いざ！「未知なる時代」を拓き、「新たな時代」を築くために、荒野を駆け抜けけん！私は白髪になった今でも、一陣の風となって諸君とともにある。年若き同志たちよ！今もなお上州の凍土、春待つ大地に立って、私は高く空を見上げ、ともに混沌に立ち向かうために、君を待ち続けている。

山形県立米沢興譲館高等学校3年生諸君の健闘を祈る！

「努力する人は希望を語り、怠ける人は不満を語る。」戦後の文壇を牽引し続けた井上靖の言葉です。戦後から本格的に文筆活動を始めた彼の言葉を想像すると、この言葉には困難を切り開こうとする、筆舌に尽くしがたい強い意志を感じます。また、この言葉は自分を振り返るとき、よく思い出す言葉でもあります。努力している人の言葉は常に「こうすればいい」、「もっとこうできればいい」。全て未来志向です。何かに夢中になって努力しているときに不満の言葉は出ないものです。君たちは努力ができる集団であると思っています。今はどうでしょう。希望を語れていますか。まだ足りないところがある不安、結果に対する不安、初めての大学受験への不安、どうなるかわからないところに不安はつきものです。しかし、努力への自負があれば、あとは大いに希望を語ればよいのです。自ら求め、前を向き、努力をしたものは必ず大きなものを得ます。人生の鉄則です。自信を持って、希望を語り、努力をしましょう。

キャシーデビットソンの予測、マイケルオズボーンの予測、カーツワイルの予測、AIの進化による社会の変化が様々予想されていますが、社会の変化がどうあれ、個人ではなく社会で生き抜いてきたのが人間だと思っています。AIに仕事が代替されていくために生活が困難になる人を横目に、自分は代替されにくい職業で勝ち組を謳歌する、なんて生きかたはして欲しくないと思うのです（もちろんそのような社会が到来するかどうかも不明ですが）。また、かつて産業革命時にイギリスでは雇用喪失の不安からラッドライト運動が起きました（知らない人は世界史選択者 or 小林啓先生に聞いてください）。でも、雇用は別の形で創出され、運動を起こした人々が危惧した通りには社会は進んでいません。もちろん、世界には解決すべき課題が山ほどありますが、変化を社会全体で請け負いながら、人間は生きてきたと思います。困った人がいるときは助け、困ったときは助けてもらい、そうやって今までも人は生きてきたのだと思います。社会の仕組みや動きは変わるかもしれませんが、人の価値は不易のものです。

これからの未来を、希望を語りながら創るのか、不満を語りながら横目で見て過ごすのか、日本一の高校生は、大いに希望を語り、惜しみなく努力し、未来を創るべきです。一番初めに「命を大切にすること」について書きました。私が今現在答えられるのは、以上の通りです。「命」とは、個人の生命活動のみを指していません。でも、一人の「命」がきちんと輝かなければ、社会という「命」は上手く動かないと思っています。この文章は全て、「命」について書いたつもりです。どのようにつないで読んでもらってもかまいません。でも、少しでも、希望を持ち、受験に向かってくれればと思います。

もう少し伝えたいことがあります。「贈与」についてです。でもそれは、君たちが卒業するときに、話したいと思います。

センター試験前日に贈る言葉として適切だったのか、少し迷いましたが、受験に必死に向かったときにしかわからない話のような気もしました。おうちの方や友人、先生方、これまで出会った人とのつながりで、今の君たちがいます。そのことを誇りに、まずはセンター試験を迎えましょう。